

震災をきっかけに、 手話という生きがいを見つけた。

墨田教会 江幡晴代さん

江幡晴代さんは、長年勤めた宝飾店を退職後しばらくして飲食店のパート従業員として働きはじめたが、そこでいじめにあう。生きていくために始めた仕事の場で陰湿な仕打ちに耐える日々。いつしか自分に自信がもてなくなり、生きる意味さえも見失ってしまう。そんなとき、亡き母と親しくしていた人たちとのふれあいが心の支えになり、「自分も誰かの支えになれるように」と、手話を学び始める。平成23年3月11日、東京の自宅で手話の勉強をしている時に東日本大震災に見舞われた。激しい揺れによってテーブルの上のコーヒーが倒れ、テキストにかかってしまった。ところがよく見ると「生きる」を表す手話の絵柄は汚れていない。江幡さんは、「生きる意味を考えなさい」という仏さまからのメッセージであると受けとめ、「手話をとおして人さまのお役に立ちたい」と強く願うようになった。いま、手話という生きがいを見つけた江幡さんは、水を得た魚のように生き生きと過ごしている。



持ち味を發揮する

持ち味や個性というとき、私たちは多くの場合、個々の際立った能力や力量をさすようです。しかしそれだけでは、とりたてて才能といえるものがない人に持ち味や個性はないということになってしまいます。何が自分の持ち味なのかわからず、自分に自信がもてないとか、自己肯定感が低いと悩む人の多くは、持ち味や個性のとらえ方に迷うあまり、思い詰めてしまっているのかもしれない。

自分のことを知りたければ、まず外に出て、人と交わり、一緒に体を動かしたりするのいいと思います。すると、自分がほんとうに好きなことや自信のもてる何かが見つかるのです。「持ち味は縁によって開く」ということです。しかも、能力や才能だけでなく、たとえば花のように、そこにいるだけですでに持ち味を發揮している——そのような一人ひとりであることを発見するので。そして、その気づきによって、自己評価はもちろん、他の人を見るときにも豊かな見方ができます。それは、たとえば単に短所を長所と見るような、いわばテクニクではなく、短所も長所も含めて「あなたは大切な人」と称え、すべてを生かすまなざしです。そのように見る素直な眼、心を具えていることが、私たち人間本来の持ち味だと思うのです。

立正佼成会